

讃岐香川の様々な文化発展を応援します。

文化通心

B U N K A T S U S H I N

2023冬 No.120



「工芸」でさぬきを愉しもう

今、香川で工芸について聞いたら「まちのシュレ963」の谷真琴さん。2023年秋に牟礼、庵治、屋島を舞台に開催された「工芸ウィーク」の実行委員会を率いて、新たな門出を果たされた。おりしも本業が神戸阪急への進出も決まり、超多忙の中での開催だった。工芸の新たな時代が始まろうとしていると思うとワクワクする。

● 第9回 あ・うんの数寄講座

茶の湯をさらに楽しむ夏期講習(後半)

● 晴友会研修旅行 ● やしまーる工芸茶会

● 12月から2月までの茶華道情報

発行：公益財団法人 中條文化振興財団

〒760-0017 高松市番町2丁目1番12号

TEL (087) 826-3355 FAX (087) 826-2212

2023年冬号 No.120 12月1日発行(季刊)

茶の湯をさらに楽しむ夏期講習

第3回 8月20日(日)

「棗のできるまで」

鎌倉建長寺開山堂修復」

講師 前端 春斉

(茶乃湯塗師・公益財団法人無限庵代表理事)

石川県の漆器産地は大別して、輪島、金沢、山中がありますが、私は山中で茶道具の塗師をいとなむ前端春斉と申します。

我が家はもともと木地師(木地師の発祥は安土桃山時代、所によつてはもつと平安時代まで遡る伝承を語りますが、諸国森林伐採を許されて山の八合目以上の木は自由に切つてもよいという、天下御免の鑑札が与えられていたと言います)を家業としていましたが、ある時、先代・前端的雅峯が父親に百個の棗の木地を買つてもらつた中から十個を下地から上塗りまでの全工程を一人で仕上げて京都に出向き、仕事の腕と申しますか、作品の完成度をお認め下さるたくさんの知己を得て、大徳寺金毛閣修理の伝統漆芸仕事に携わり、大徳寺様と茶の湯という世界にご縁をいただくようになったと申してお

りました。

私も鎌倉建長寺の開山堂(中国宋の時代に来朝した蘭溪師の木坐像を安置)屏の塗り直しという大役を仰せつかったことがありました。折々のスナップ写真を少しご覧いただきましたが、完成の暁には管長猥下しか入室できないお堂で、建長寺伽藍の中でも大変重要な建物です。屏の取り外しから始まつた修復仕事の途中は、当時の職人の巧みな仕事跡の確認、それに恥じぬように精進を重ねる緊張感の連続でしたが、父の大徳寺仕事の技や精神を追体験するようないがありました。

今日は棗のできるまでを作業写真に沿つてお話させていただきます。

棗の本体は木地師が木材を木取りして高速回転のロクロや鉋を使つて成形したものです。その、下地を整えるところから私の仕事が始まります。越前和紙を巻いたり、地の粉(珪藻土)を塗つて厚みを付け、生漆を透明に仕上げて、時には色を混ぜたりして一塗りする度に漆室に入れて乾燥させ、それを何回も何回も塗り重ね硬くて強度のある、また、薄くて軽い棗に仕上げていきます。塗りは若い女性の髪の毛を杉板に挟んだ刷毛を



使い、加飾と言つて文様を色漆で描く時は船ネズミの毛で作つた穂先の長い筆を使います。透明な漆に色顔料を混ぜて加飾を施した蒔絵(豪華な高蒔絵)、白蝶貝や夜光貝の螺鈿、時には鉛や卵殻を施し、金箔を貼つたり金粉を蒔く梨地仕上げなど自在な工法がありますが、どれも最後には柔らかな木炭で研いで仕上げます。昔ながらの伝統技法の世界は何事にも普通というのが前提ですが、漆塗りに欠かせぬ室は、最近、温度と湿度を調節管理した回転式の棚を設置した、随分と効率の良い設計になっています。余談ながら、前述の建長寺の屏塗り直しの時はいつも使っている茶道具用の室には大きくて入りきらず、部屋を目張りして作つた専用の室が活躍しました。



今日は見本の棗だけでなく、道具や材料なども並べておきましたので、是非お手にとってご覧ください。

棗にしては大きな木地物(これは鉄刀木製ですが漆塗りも多々)は挽家といつて仕服に入れた茶入の保護箱で、棗の原型だと言われています。赤富士に波模様の蒔絵のオーソドックな平棗、その隣、一見、茶器の中次みたいな円筒は聖餅箱と言ひまして、カトリック教会のミサの折に聖体に見立てたパン片を入れる箱です。キリスト教布教が許されていた安土桃山時代、日本からヨーロッパへ向けての輸出品としてたくさん作られたそうですが、文字通り輸出して国内に残存するものは少なく、鎌倉東慶寺蔵の重要文化財が有名です。

ここに飾ったものは、平成六年に武者小路千家当代不徹斎宗守様が、イタリャバチカン市国ローマ法王ご訪問のお土産にご用命いただいた折の試作品で、蓋表にイエズス会のIHSや花型クルスの約束柄を描き、本体は白漆に仕上げました。特別謁見を許されたお家元が、日本文化を代表する茶の湯のご説明歓談なされた折に、お茶の接待に随行した一員としても思い出深い作品です。

最後に、(公財)前端的文化振興財団「無限庵」のご案内を少し。明治末期に旧加賀前田藩の家老だった横山家住宅が山中温泉に移築され、茶室や茶房を付属した建物です。見事な武家書院の見学や前端的雅楽制作の懐石道具で茶懐石をお楽しみいただけます。何かの折のお立ち寄りをお待ち申し上げます。(妹尾共子)

第4回 8月26日(土)

「佐竹本からみえる 数寄者の想い」

講師
降矢哲男
(京都国立博物館 調査・国際連携室長)

佐竹本とは三十六人の優れた和歌の詠み人である歌仙を描いた「佐竹三十六歌仙」のことで、京都の下鴨神社に伝わっていたものが幕末期に秋田藩主であった佐竹侯爵家に伝わっていたことから「佐竹本」と呼ばれた。



この佐竹本は平安時代の公家で歌人の藤原公任により、飛鳥時代から平安時代にかけて活躍した歌人三十六人を取り上げて、その歌とあわせて彼らの肖像を描いて編まれたもので「三十六歌仙絵」という。現在は一枚づつ掛け軸に仕立てられたいるが、かつては二巻の絵巻物として伝わってきたものだった。鎌倉時代以降、多くの三十六歌仙が描かれているが、その中でも佐竹本は高価な紙や絵具を用いて作られており、他を圧倒するものでした。

その佐竹本がなぜ売立てに出されたのか？明治の廃藩置県により旧大名家の佐竹家も生活が苦しくなり、大正六年に他の重宝と合わせて売立てが行われ、付けられた値段も現在の貨幣価値にすると数十億円という破格の金額だった。到底、一人の道具商で落札できる額ではなく、最終的に札元十六人で落札することになり、ここから佐竹本の流転がはじまっていくことになる。

大正のはじめ、手広く事業を行って巨万の富を築いた山本唯三郎が佐竹本を購

入し落ち着いたと思われたが、第一次世界大戦とそれに続く世界恐慌などで大打撃を受けた山本も二年で佐竹本を手放すことになり、当時、財界の大御所で希代の数寄者でもあった益田鈍翁に相談に行った結果、歌仙断巻式へと一気に進んでいったのでした。

佐竹本は巻物となっていたが、それだけの歌仙を張り合わせてつくられていたので鈍翁は一枚づつ剥がし、茶友たちを補佐役として最高額四万円、最低額三千元と評価をつけた。もちろん、最高額のもは「斎宮女御」です。

大正八年、増田邸の応挙館(現東京国立美術館に移築)で五十名ほどの財界人や数寄者・美術商などが集まり籤引き抽選が行われた。その際、中心的な立場の鈍翁が最低位の一枚を引き当て機嫌が悪くなったが、何度か歌仙絵の交換がなされ最高位の「斎宮女御」の所蔵者となった。なお、旧所蔵者の山本唯三郎には、世話人一同から「源宗宇」が贈られました。

これらの歌仙絵は所有者によって軸装され、茶会でのお披露目や展覧会等への出品などで茶人のみならず好事家たちの垂涎の的となり、多くの歌仙絵は当初の所有者たちの手を離れ、その時々数寄者へと移っていった。そして、新たな持ち主によって当初の表具が変えられることもあった。例えば、北村美術館所蔵の「藤原仲文」もその一つで、住友財閥の鈴木馬左也から蜂須賀家へ、そして北村

家へと動き、一文字のみ変えて表装し直しされています。

「今回、三十六枚のうち三十一枚を細かく調べることで、資料として残すことに貢献できて良かった。そして、百年後に比べて見ると、持ち主が変わると表装がどのように変わったのかがよくわかるでしょう。文化財保護の面から言えば、巻物が分断されたことは残念ですが、個人が大切に所蔵していたことにより海外に流出したり戦災で焼失することなくもなくて良かったと言えます。今後は、文化財保護に関わる者として、個人所有の物の保存状態などを調べ、良い状態に保つ手助けをしていきたいと思っています」と講演を終えられました。

(千葉規美子)



「茶の湯釜 その魅力」

講師 大西 清右衛門 (千家十職 釜師)

中條文化振興財団夏期講習 大西清右衛門の巻に参加させていただいたのでご報告いたします。終了予定時間を1時間オーバーしたところで、「まだ時間大丈夫ですか？」と清右衛門さんに聞かれ、中條さんも返事に困っておられました。日本屈指の茶釜師の、釜に対する情熱がひしひしと伝わってくる講演でした。



茶の湯の時間を心地よく過ごすための機能性と、茶碗や掛け軸などの茶道具と調和する美しさの両方を兼ね備えた形。そして茶道の趣向や茶人の感性を反映した釜肌や地紋など、茶道に寄り添い茶道の精神や美意識を体現する大西清右衛門の茶釜。初代・浄林が創業以来、16代・大西清右衛門まで400年以上にわたる歴代の作品には、独自の茶釜のスタイルが見て取れます。

名工といわれる二代目浄清の傑作「鶴の釜」など、名品の数々をスライドで見せていただきながらのお話の中で、「400年前の先人や先祖の技術を抜けないければ次期清右衛門(17代目)は450年前の技術を抜かなければならなくなる。400年前に失われた技術を復活させ、そこから新しい釜を作っていく」と語られていたのが印象に残っています。

受け継がれてきた伝統技術を守り、磨き続け、そして先代を超える。創業以来常に新しい技術と創造性を代々が追求し

続けた大西清右衛門だからそのお話だと思えます。襲名の際には歴代の作品を先代から見せてもらいう大西家の習わしがあるそうで、清右衛門さんは実際に過去の名品の写し造りに取り組みます。

長い歴史の中で作られた傑作との対峙は、同じ素材は無し、技法も完全な形で伝わっていない、そんな状況の中で清右衛門さんは奇跡的に作られたような過去の名作に近づく作品づくりへの挑戦を今も続けています。中には持ち主のところにいき実際に寸法を採っても結局は出来ないとしつぽをまくような作品もあったようです。

そして平成8年には、芦屋釜の500年前の技法である「挽き中子技法」の再現に成功し、そこからまた新たな創作に挑んでいく。さまざまな時代の変化や試練を乗り越えながら伝統と革新、継承と発展を両立させてきた大西家の伝統的な技と美意識を受け継ぎながら、当代清右衛門もまた、新たな時代の茶の湯釜を創り出しているのだと感じました。

最後に釜の仕舞い方をお話下さいましたので記しておきます。湯を沸騰させた状態で釜の湯を空ける↓炭を取り除いた炉にかけ余熱で乾かす。余熱が低い場合はドライヤーをあてて。以上。

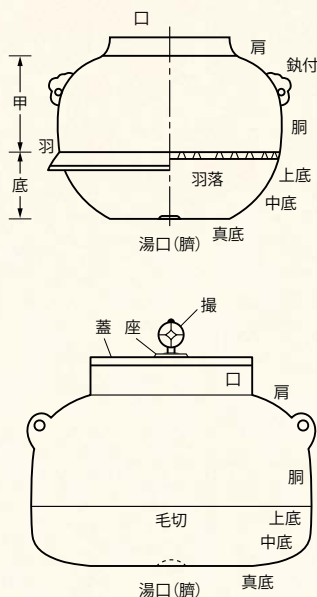
浄林の釜に昔を時雨れけり 正岡子規

(原 大策)



【釜の構成】

釜は上半の甲と下半の底および付属物としての蓋からなる。甲は口・肩・胴・鉄付および胴下の羽、あるいはその羽の落ちてできた羽落、または鋳物技術上、甲と底との間にできる筋状の毛切からなる。底は上底・中底・真底と湯口(臍)よりなる。蓋には通常、座と撮がつき、芯および芯をとめる天座、ときには下座がつく。



美濃桃山陶の故郷を訪ねて



友の会の研修旅行は、コロナ禍が明けて去年に続いて二回目。今年は九年目となった夏期講習が終わって、にわかに美濃に行きたいと言う要望をいただき、この度の研修旅行は岐阜まで足を伸ばして、2泊3日の企画にいたしました。

初日は、朝、財団を7時に出発して明石大橋を渡り、信楽陶苑たぬき村を経由して近江牛のランチを堪能。

午後は、名古屋の徳川美術館を訪ねました。国宝の家康の太刀、銘・来孫太朗作は刀としては珍しく正応五年八月十三日と刻印されていて鎌倉時代から700年も時が経つのに、とても美しい刀でした。また、佐竹本三十六歌仙絵の源宗于蔵にも再会しました。織部筒茶碗、銘・冬枯も小振りで印象的な茶碗でした。

泊まりは蒲郡のリゾートホテル。夕食が終わって、丸亀の高畑先生が、ご自慢の茶箱を持参されて、皆さんにお茶を振舞って下さいました。お菓子は三友堂さ

んの栗納豆。

2日目は、岡崎の八丁味噌の郷に寄って岐阜県の大垣市に入る。ランチは老鰻亭魚関で名物の鰻まぶし。午後は市之倉の幸兵衛窯に到着。

幸兵衛窯の歴史は二百年。夏に講義をしていただいた加藤亮太郎さんは八代目の当主。早速、福井から移築したという古陶磁資料館のお座敷で、お茶を一服いただきました。亮太郎氏が使われる穴窯のすぐ下にあつて、窯の火入れの時には拠点となる場所です。かつては棟方志功もここで作陶されたとか。小雨で、少し寒かったので生き返る思いでした。

隣の工芸館では五代幸兵衛の青磁、金蘭手などの作品。本館では三彩の人間国宝だった加藤卓男氏と七代幸兵衛の陳列室。ペルシャのラスター彩陶の代表作も陳列されていました。亮太郎氏は、美濃桃山陶の再興を目指して、歴代当主はそれぞれに違う作風の研究をしながら、幸兵衛窯の運営を両立させてこられました。

その後は、作陶館や市之倉さかづき美術館に別れて作陶や見学をしました。

三日目は、予想外に晴れて湖東三山の西明寺で紅葉を楽しみました。本堂の瑠璃殿と三重塔は、鎌倉時代に創建され、国宝。ご本尊は秘仏になっていて薬師如来立像と二天王立像は共に平安時代に造られました。普段桜も咲いていて、朝食の後の散歩としてはちょうど良かったです。

その後、大阪方面池田市の逸翁美術館に。小林一三の生誕150年で「タノシイチャノユ」展は、明治の数寄者の機知に富んだ道具の数々を拝見しました。光悦好みのダイナミックな竹垣文釜は名越浄味。古田織部の共筒茶杓「長刀」も印象的で、外国からの見立て道具も本当にタノシイ感じでした。逸翁の書跡五字「是楠忠辞乎」には思わず笑ってしまいました。

そして、最後に芦屋市の滴翠美術館。山口財閥の当主の邸宅跡が美術館になっていました。安井武雄氏が設計した昭和初期のモダニズム建築で、芦屋の街が一望できる展望室もありました。ここでは、秋季展「茶会に招かれて」として、展示室を茶室に見立て、炭道具と濃茶席と薄茶席の道具組がありました。

床は、池大雅の富士十二景図から二服。伝藤原佐理筆の筋切・通切は古今集から紀貫之「屏風のゑになる花を読む」に始まるお洒落な道具組が続く。香合は祥瑞蜜柑香合。茶入れも宗和箱の仁清肩衝・色絵鱗波文。茶杓は直斎箱の武野紹鷗。お茶碗は一元黒、銘・晩鐘。朱茶通は庸軒好みで初代宗哲造。茶杓は北問道陳、不味公追筒など見所がたくさんありました。

閉館時間を少し過ぎていたのに、見学させていだいて感謝でした。遠距離のバスの旅は楽しいですが、皆さん無事に帰って来られて、本当に良かったです。お疲れ様でした。



KOGEI WEEK 2023

やしまーる 工芸茶会に参加して



今回のイベントでは、「工芸博覧会」の会場として讃岐工芸のインスタレーション展示を行いました。

そして協賛のお茶会は十月二十八日と二十九日の二日間、午後から夜にかけて、ちょうど十三夜のお月見に合わせて開催いたしました。

やしまーるに常設の立礼式のテーブルワゴンは、香川大学の井藤先生と生徒さんが、天板に庵治石の屋根材の残りを利用して作られました。火気厳禁の場所なので、小型の電磁調理器に茶釜を乗せて湯を沸かしましたが、バーカウンターとしても使えます。

今回は、お茶会というより工芸ウィークに相應しい楽しいワークショップと言うことで、先頃手に入れた庵治石の小型の石臼で、碾茶を挽いてもらって、挽きたてのお抹茶の香りを体験して、ご希望の方にはご自分で抹茶を点てていただきました。

十一月は、茶人の正月と言って、五月の茶摘みの頃から半年寝かせた碾茶を茶臼で挽いて、抹茶の新茶を楽しむ季節です。ので、少し先取りしてみようという試みでした。

庵治石の職人さんが小型で性能の良い石臼を作ってくださったので、茶人じゃなくても誰でも気軽に体験できるようにしました。これはとても画期的な事です。

また、お茶碗は以前、香川県漆芸研究所の生徒さんが讃岐漆芸の四技法で作られた漆のお茶碗を使わせていただきました。讃岐漆芸というのは独特です。蒟醬、存星、彫漆と後藤塗りのお茶碗とミャンマーの古都パガンで購入した元祖蒟醬のお茶碗の中から好きなものを選んで、お茶を点てるのは、楽しい体験だったのではないかと思います。

屋島は狸の全国的な親分であつた太三郎狸の本拠地なので、お菓子は狸の焼印

を押したどら焼きを特注してもらいました。

やしまーるは、人々の交流の拠点ですから、今後とも季節に関係なくこうしたワークショップが開けたら楽しいかと思ひました。



表紙にもあるように「工芸」でさぬきを愉しもうというキャッチフレーズで始まった今年の工芸ウィークは、牟礼、庵治、屋島が舞台となりました。メインビジュアルは、一九三〇年頃の屋島、八栗の鳥瞰図で、その当時から観光地として賑わっていました。

庵治は庵治石の産地で、たくさんの優秀な石工がいたため彫刻家のイサム・ノグチや流政之のアトリエもありアートの拠点でもありました。

さて、屋島に新たにできたランドマーク「やしまーる」は山上交流拠点施設。観光や交流が可能な場として生まれしました。全面ガラス張りの回遊式の斬新な建物で、屋根材には庵治石の薄板が使われています。



葛餅にも季節を込めて

見た目はとてもシンプルですが、口に入れると焼いた表面と、生地 of のなんともいえないやわらかかつ、なめらかな葛の食感がとてもおいしいお菓子です。

水溶きした葛粉に砂糖、餡を加えて練り、型に流して蒸したあと六方を焼いた『葛焼』。葛焼餅ともいい、梅雨入りぐらいからの夏の間は、特別に珍重され、お茶会には欠かせないようです。

こちらは小豆ではなく、いちじくを使っていて甘さ控えめで口に入れるといちじくの香りが広がり、葛と種の食感がたのしめます。

練り込むものは季節によって異なるということで、今回は『柿』だそうです。



同じ『葛焼』でも「小豆」「いちじく」「柿」と練り込むものによって、風味や食感が変化し、四季を感じる『葛焼』はいかかですか。

お茶の風景(22)

冬これから

異常気象に戸惑う昨今ですが、かつて、高松に住んで久しいカナダ人の友人が温暖な高松は「春夏秋冬」で冬がないと表現しました。

彼女ならずとも、雪に閉ざされる地に住む人たちには年に一、二度の雪をほしやぐ土地柄に冬のイメージは重ねがたいかも知れません。

お茶の世界では暦通りの冬を夜咄や暁の茶事などで楽しみます。昔、夜咄の茶事に招かれた時に素敵な雪に出会いました。中立て茶室から出た宵闇の露地に白いものがちらつきはじめ、一連のもてなしに感謝しながらの退席時。蹴り口の戸を曳いた正客があつと声をあげて連客を振り返りました。次々と感嘆の声をあげながら露地に出揃った一同は、積雪に明るむ夜闇の庭にしばし立ちすくんで静寂を楽しみました。

「オリオンは高みに空の冬支度」。

冴え冴えと夜空に輝く星たちは気象に左右されることなく悠久の時を正確に刻んで、これからの讃岐の冬の天空を彩ります。

財団行事予定
(12月～2月)

休館日水曜日

お申込みは財団まで。急遽中止になる事もあります。

12月

- ◆ 書道教室 毎月第1・第3金曜日
森本義人先生
12月1日・15日(金) 午前10時～12時
- ◆ 12月懸釜「師走茶会」
※ご好評につき満席となりました
日時 12月3日(日)
処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)
濃茶 武者小路千家
第十四代家元 千宗守 宗匠
薄茶 武者小路千家
家元教授 高島守徹 先生
会費 30,000円(濃茶・薄茶・点心席)
- ◆ 和菓子講座 毎月第2金曜日
高橋初乃先生
12月8日(金) 午前10時～12時
- ◆ ヤングヤング(子供茶の湯教室)
毎月第2・第4土曜日 山下純子先生
12月9日・23日(土) 午後1時～
- ◆ 月に一度の喫茶室 毎月第3火曜日
12月19日(火) 午前10時～午後2時(受付)
自由なお時間にどうぞ(ランチは要予約)。

1月

- ◆ 初釜
「新年を迎え、辰年らしく明るい話題に満ちた年になれるといいですね」と席主のメッセージと合わせて点初めのお席をご案内いたします。新春を祝う縁起の良いお席で一年の福を招き入れましょう。好例の福引もありますのでお楽しみに。
日時 1月5日(金)
処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)
席主 武者小路千家 西村妙純
会費 8,000円(濃茶・薄茶・点心席)
入席時間(各席8名・2時間30分を予定)
第1席 9時 第2席 9時50分
第3席 10時40分 第4席 11時30分
第5席 12時20分 第6席 13時10分
第7席 14時
申込 電話受付 12月4日(月) 10時～
- ◆ 書道教室 森本義人先生
1月12日・19日(金) 午前10時～12時
- ◆ 和菓子講座 高橋初乃先生
1月12日(金) 午前10時～12時
- ◆ ヤングヤング 山下純子先生
1月13日・27日(土) 午後1時～
- ◆ 月に一度の喫茶室 毎月第3火曜日
1月16日(火) 午前10時～午後2時(受付)
自由なお時間にどうぞ(ランチは要予約)。

2月

- ◆ 書道教室 森本義人先生
2月2日・16日(金) 午前10時～12時
- ◆ 懐石講座 三友居 山本勝先生
2月6日(火) 午前11時・午後3時
- ◆ 和菓子講座 高橋初乃先生
2月9日(金) 午前10時～12時
- ◆ ヤングヤング 山下純子先生
2月10日・24日(土) 午後1時～
- ◆ 2月月釜 五人様茶会
「極寒の一日に暖かい粗茶一服差し上げたく、お誘い合わせのうぜひお越しくださいませ」と席主のメッセージを添えてご案内いたします。
日時 2月18日(日)
処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)
濃茶 表千家流 井川和彦
薄茶 武者小路千家 山本守鶴
会費 6,000円(濃茶・薄茶・点心席)
入席時間(各席6名・2時間15分を予定)
第1席 9時 第2席 10時30分
第3席 11時15分 第4席 12時45分
第5席 14時15分 (各席A席・B席)
申込 電話受付 1月15日(月) 10時～
- ◆ 月に一度の喫茶室 毎月第3火曜日
2月20日(火) 午前10時～午後2時(受付)
自由なお時間にどうぞ(ランチは要予約)。

茶華道ガイド

表千家同門会香川県支部 TEL (087) 845-4638

- 2/11 東讃四季茶会 席主：吉川宗照
中條文化振興財団 800円 9:00～15:00
- 3/3 茶の湯文化にふれる市民講座
講師：千家十職 奥村吉兵衛
高松市生涯学習センター 無料 12:00～15:30

茶道裏千家淡交会高松支部 TEL (087) 841-0605

- 〈淡交会高松支部月釜〉 前売券のみ・入席時間指定
大西・アオイ記念館 800円 9:30～15:00
- 12/10 席主：植村宗民
2/4 席主：山本宗佳

武者小路千家香川官休会 TEL (087) 862-8574

- 12/10 香川官休茶会 席主：官休会
披雲閣 2,000円(二席) 9:00～15:00
- 1/28 香川官休会 月釜 席主：溝渕守保
無量寿院 800円 9:00～15:00

高松市香南歴史民俗郷土館 TEL (087) 879-0717

- 〈由佐城月釜茶会〉 前売券のみ・入席時間指定
第2研修室(和室) 600円 9:30～(全6席)
- 12/17 席主：三好宇太郎(武者小路千家)
2/18 席主：綾野宗悦(茶道石州流宗家高松会)

急遽中止等の変更となる場合があります。

令和6年度 助成金応募受付中

対象事業

令和6年4月1日から令和7年3月31日までに実施予定の文化事業。詳しくは助成基準をご覧ください。

応募の方法

財団所定の助成金交付申請書を提出してください。
(HP参照)

応募締切は、令和6年1月31日。

審議委員会による書類審査を行い、必要があればプレゼンテーションを開催。

令和6年3月末までに結果をご連絡致します。

助成金の額

30万円を限度とし、活動に応じた金額を審議委員会が決定致します。

詳細(助成基準、所定の申請書等)は、当財団ホームページよりご確認いただくか、事務局までお問合せ下さい。

<https://chujo-zaidan.or.jp>

中條文化振興財団・文化活動奨励事業

10月2日(月)、令和5年度財団賞授賞式及び助成金交付団体認定書授与式を開催いたしました。

財団賞受賞者

- 庵治町才田獅子舞保存会 会長 野嶋 勲
- 川東尺経獅子保存会 会長 國方 敏弘

助成団体

- かがわ能楽普及の会 会長 横山 馨子
- 流転RUTeN 代表 吉田 亜希
- 認定NPO法人農村歌舞伎祇園座保存会



編集後記

現代の名工に香川県から三人の方が選ばれました。長年、自分の仕事としてその技術を磨かれてきた証です。しかも、進化を続けているテクノロジーも取り入れながら作業をされている様子も放映されました。しかし、機械に任せるとはならず、培われてきたご自分の手の感覚を一番の判断基準にされている。まさに、現代の名工です。

多くの分野の高齢の職人さんたちは異口同音に後に続く人に伝えることの難しさを語ります。文章や映像である程度は伝えることができます。でも、対面で教えることには敵いません。少子高齢化の影響の中でも、素晴らしい技術が受け継がれていくように願っています。

「声・情報お寄せください」

〒760-0017

高松市番町二丁目一十二

公益財団法人 中條文化振興財団編集部

TEL (087) 826-1335

FAX (087) 826-2212

info@chujo-zaidan.or.jp